

## 1950年前後のピアジェーワロン論争(2)

—1951年ピアジェ論文におけるワロンへの回答—

日下正一(福島大学) 亀谷和史(日本福祉大学) 足立自朗(埼玉大学) 加藤義信(愛知淑徳大学)

## 1. ピアジェの主張

(1) まず、ピアジェは、思考(知能)の発達においてはワロンのいう感覚運動のプロセスと言語的・概念的プロセスの2つのシステムしかないわけではなく、感覚運動的、表象的、操作的という3つのシステムが存在することを強調し、①操作的システムは感覚運動的システムを延長したものであり(たとえば、操作的段階の保存の観念は感覚運動的段階に対象の永続性としてその原型が準備されているといったこと)、②中間項としての表象的システムは、操作形成にとっての「準備」(シンボルや記号の体系が感覚運動的行為から内面化された行為への移行を促す)とともに「妨害」(変換そのものよりも形態に中心化するので操作的システム特有の可動性や可逆性、相互性への到達を妨げる)役割を果たすと主張する。

(2) 段階によって社会化のプロセスが異なり、感覚運動的段階では自分の行為とまわりの人々の行為との相互依存(たとえば模倣)に基礎を置く初歩的な社会化だけであるが、操作的段階では交換や協働に基づく思考の社会化が問題となっており、その中間の表象的段階では、個人的表象と集団的思考の中間的狀態での思考の社会化が見られるという。

(3) 集団的思考に見られる技術、イデオロギー、科学的思考という3つの形式が、感覚運動的知能、表象的思考、操作的思考という個人の思考の3つの形式にそれぞれ対応すること、しかも、両者には①イデオロギーと表象的思考がそれぞれ中間項として入ること、②操作的思考のシステムが構築されてもその基礎には感覚運動的知能のシステムが存続するように、科学的思考もまた技術に立ち戻ることができること、③表象的思考が自己中心的であるようにイデオロギーも社会(集団)中心的であり、いずれもそれぞれ操作的思考、科学的思考の形成・発展にとっての準備と妨害の役割を果たすことの3つの類似点を挙げ、自らの主張の正しさをアピールし、ワロンへの反論へと移る。

## 2. ピアジェとワロンの論争点

(1) ワロンが「子どもは社会的なものから出発し、次第に個性化される」とするのに対して、ピアジェは「子どもは自己(moi)から出発し、少しずつ社会化される」と考える。そこでワロンはこのピアジェの立場

を「**個体主義(individualisme)**」と呼んで厳しく批判するが、ピアジェはワロンの誤解に基づく表面上の不一致であると主張する。すなわち、ワロンは「自己中心性」ということばに「**個人主義**」の意味しか見いださず、「**自己の観点と他者の観点との未分化、つまり自己についての明晰な意識の欠如**」というピアジェの定義を採用しなかったとし、①ワロンのいう社会的な「**混同性**」とピアジェの「**自己中心性**」とは矛盾しないし、②ワロンのいう漸進的な分化によって獲得される自我は、ピアジェのいう「**人格**」や「**相互性**」と矛盾しない、と述べ、両者の不一致よりも類似性を強調するのである。

しかし、ワロンは「**個体主義**」を、「**人間は他者とともにあるという共同存在性をその本質とし、個人の発達もこの関係性を離れてあり得ないのに、そのような観点を脱落させて、閉じた個人から出発し人間の発達をとらえようとする考え方**」という意味で用いており、ワロンの批判はピアジェのいうような表面上の不一致として片づけることはできないものであった。

(2) 場面の知能と推論的、言語的知能の2つのシステムのみを想定し、前者から後者の発生的移行を考えないワロンに対して、ピアジェは、①感覚運動的なものに訴えなければ内面化された行為としての操作的思考を説明することはできないので、感覚運動的知能と操作的思考との連続性を仮定しなければならないこと、

<ピアジェ>

感覚運動的知能 → 表象的思考 → 操作的思考

<ワロン> (ピアジェによる解釈)

感覚運動的知能 / [表象的思考 → 操作的思考]  
(場面の知能) (推論的知能)

②『子どもの思考の起源』(1945)に見られるように、ワロンでは4歳以降の子どもだけが対象となっていて、しかも言語的な会話のみに頼っているので、感覚運動的段階の子どもについてのデータが不十分であること、を指摘した。そして、思考(知能)の発生と移行に関するこの問題をワロンとの真の不一致であると主張しているが、この問題がピアジェとワロンとの重要な論争点であることは間違いないと思われる。